

本古典集成

古今著聞集
下

西尾光一 小林保治 校注

新潮社版

新潮日本古典集成 (第七六回)

古今著聞集 下



定価二二〇〇円

昭和六十一年十二月五日 印刷
昭和六十一年十二月十日 発行

校注者

西尾光一
小林保治

発行者

佐藤亮一

印刷所

大日本印刷株式会社

発行所

株式會社 新潮社

〒一六二 東京都新宿区矢来町七一
東京 03 (二六六) 五一一 (業務)
電話 東京 03 (二六六) 五四一一 (編集)
振替 東京 四一八〇八

装画 佐多芳郎
組版 シーティエス大日本
製本 加藤製本株式会社

乱丁・落丁本は、御面倒ですが小社通信係宛御送付下さい。送料小社負担にてお取替えいたします。

© Kōichi Nishio, Yasuharu Kobayashi, Printed in Japan, 1986.

ISBN4-10-620376-6 C0393

目次

古今著聞集下	細目	三
凡例		一九
卷第十一	画図第十六・蹴鞠第十七	二五
卷第十二	博奕第十八・偷盜第十九	六四
卷第十三	祝言第二十・哀傷第二十一	一一
卷第十四	遊覽第二十二	一三九
卷第十五	宿執第二十三・鬪諍第二十四	一五〇
卷第十六	興言利口第二十五	一八五

卷第十七	怪異第二十六・變化第二十七	二六六
卷第十八	飲食第二十八	三〇三
卷第十九	草木第二十九	三一九
卷第二十	魚虫禽獸第三十	三九
解 說		四二
付 録		
主要原漢文		四六五
人名・神仏名索引		四六七

古今著聞集 卷第十一

画 図 第十六

- 二三 (序) 画図は、自ら想ひ心に遊ぶ閑中の玩たる事 二五
- 二四 紫宸殿賢聖障子並びに清涼殿等の障子の画の事 二五
- 二五 仁和寺御室に金岡が画ける馬、近辺の田を食ふ事 二九
- 二六 花山院、書写上人性空の像を写さしめ給ふ事 二九
- 二七 巨勢弘高、地獄変の屏風並びに千体不動尊を書く事 三〇
- 二八 巨勢公忠、自画の屏風に必ず署名したる事 三一
- 二九 小野宮実頼、常則他行のため、公望に衝立障子に松を書かせたる事 三三
- 三〇 為成、一日が中に宇治殿の扉絵を書く事 三三
- 三一 成光、閑院の障子に鶏を書く事 三三
- 三二 絵師良親、屏風二百帖に絵を書く事 三三
- 三三 永承五年四月、麗景殿女御絵合せの事 三三
- 三四 玄象の撥面の絵様の事 三七
- 三五 鳥羽僧正、絵を以て供米の不法を諷する事 三八
- 三六 鳥羽僧正、侍法師の絵を難じ、法師の所説に承伏の事 三九
- 三七 後白河院の御時、松殿基房年中行事絵に押絵の事 四〇
- 三八 絵難房、必ず絵を批難の事 四一
- 三九 伊予入道、幼少の時不動明王の像を書く事 四一
- 四〇 右大将頼朝、御宝蔵の絵を拝見せざる事 四一
- 四一 後鳥羽院、御あらましの御幸の絵を藤原信実にかせ給ふ事 四四

四〇三 順徳院御位の時、藏人孝道に撥面の絵を尋ね給ふ事 四〇四

四〇四 後堀河院の御時、絵づくの貝おほひの事 四〇六

四〇五 後堀河院の御時、左京権大夫信実をして、北面等の影を書かしめ給ふ事 四〇七

四〇六 絵師賢慶が弟子の法師、その絵に依りて勝訴の事 四〇八

四〇七 光明峰寺道家、左大臣実経の為に一条室町の御所修理の事 四〇九

蹴鞠第十七 五〇

四〇七 (序) 蹴鞠の逸遊は文武天皇大宝元年に始まる事 五〇

四〇八 後二条師通、白河の斎院にて鞠の会の時 五〇

四〇九 知足院忠実、白河の辺にて鞠会の時 五一

四一〇 侍従大納言成通の鞠は凡夫の業に非ざる事 五一

四一一 賀茂神主家平、二重鞠を見分くる事 五九

四一二 安元御賀の時、刑部卿頼輔賀茂神主家平に上鞠の故実を聴く事 六〇

四一三 治承三年三月、御方違の行幸に七条殿の御壺にて御鞠の事 六一

四一四 後鳥羽院を御鞠の長者と号し奉るべき由、按察使泰通等表を奉る事 六二

四一五 順徳院御位の時、高陽院殿に行幸御鞠の事 六三

四一六 四条院御位の時、仁寿殿東向の御壺にて御鞠の事 六三

古今著聞集 卷第十二 六四

博 突 第十八 六四

四一七 (序) 文武天皇、王卿等を喚びて博突せしめ給ふ事 六四

四一八 惟喬親王、双六の質に小野宮を取り給ふ事 六四

四一九 延喜四年、右少弁清貴と寛蓮法師と囲碁の事 六五

四二〇 基勢法師、囲碁の賞に依りて銀の笏を賜る事 六五

四二一 承平七年、右大臣家の饗に中務卿宮と右大臣と囲碁の事 六五

四四 恵心僧都の妹安養の尼、盗人に逢ひて奇特の事（抄入）……………二〇九

古今著聞集 卷第十三……………二二

祝言第二十……………二二

四七（序） 流俗の習ひ、境に触れ事に随ひて、みな佳祝をなす事……………二二

四八 延長二年十二月、内裏の御賀に中宮の御方より楽器を献上の事……………二二

四九 承平四年三月、皇太后穩子五十算の御賀の事……………二三

五〇 康和四年二月、御賀の試案の事……………二三

五一 仁平二年正月、鳥羽法皇五十算の御賀の事……………二五

五二 建長元年十二月、日吉禰宜成茂七十賀の事……………二七

哀傷第二十一……………二八

五三 醍醐天皇の山陵に御硯・御書等を入れ奉る事……………二八

五四 七歳の孤児、空也上人の詠歌を解し慰められたる事……………二八

五五 法興院入道殿葬送の夜、万人騒動の事有るに道長自若たる事……………三〇

五六 後中書王具平親王、雑仕を最愛せられたる事……………三〇

五七 藤原敦光、江帥の旧宅を過ぐとて秀句の事……………三二

五八 二条右衛門佐重隆、没後に冥官となる事……………三三

五九 菅登宣が夢に、故式部権少輔成佐、地獄の苦を語る事……………三三

六〇 鳥羽院御葬送の夜、西行法師詠歌の事……………三四

六一 二条院崩御の後、中納言実国白河院に参りて詠歌の事……………三四

六二 高倉院の女房出家の後、大納言実国かの女房に歌を申し遣はす事……………三五

六三 後京極良経、夢に冷泉内大臣良通と逢ひ、六韻の詩を和する事……………三五

六四 後京極良経、故中宮権大夫家房の旧宅を過ぎ独吟の事……………三六

六五 西行法師、釈迦入滅の日の往生を願ふ事……………三七

四〇 建永元年三月、後京極良經曲水宴を催さんとし、日到らざるに俄かに逝去の事……………一三八

四一 中御門中納言宗行、菊川の遊女が家の柱に、秀句と和歌を書付くる事……………一三九

四二 後高倉院七々日忌仏事に、導師聖覺法印、御祖母七条院の沙汰にて御追善の文を唱する事……………一四〇

四三 壬生二位家隆、七首の和歌を詠じて往生の事、並びに侍從隆祐詠歌の事……………一四一

四四 四条天皇崩御葬送の事……………一四二

四五 侍從隆祐、明義門院の薨去を聞きて詠歌の事……………一四三

四六 花山院御出家の事（抄入）……………一四四

古今著聞集 卷第十四……………一四五

遊 覽 第二十二……………一四六

四七（序）周覽の遊びは、春夏秋冬それぞれに、その興甚だ多き事……………一四七

四八 寛治六年十月、堀川院殿上逍遙の事……………一四八

四九 白河院、深雪の朝小野皇太后宮の許へ雪見の御幸の事……………一四九

五〇 白河院、深雪の夜馬場殿へ御幸の事……………一五〇

五一 保安五年閏二月、白河・鳥羽両院御同車にて白河の花御覽の事……………一五一

五二 承元五年閏正月、九条大納言道家、内侍等を引き具して雪中の鷹狩を見る事……………一五二

五三 亭子院の御時、大井川行幸に紀貫之和歌の仮名序を書く事（抄入）……………一五三

古今著聞集 卷第十五……………一五四

宿 執 第二十三……………一五五

五四（序）宿執は天性の染着する所なる事……………一五六

五五 高陽院の競馬に、伯助信尾張種武に勝ち、共に落馬して死する事……………一五七

五六 承保二年八月、高陽院競馬に、下野助友秦近重に勝ち、落馬して頓死の事……………一五八

五七 宇治殿頼通、平等院の居間に執心の事……………一五九

四四	僧広清・円久・円善、没後に法華經読誦の事	一五四
四五	堂僧済範、音楽に耽り最後の時万秋楽を聞きて遷化の事	一五五
四六	俗人時資、白河院の勅定を拝辞して、御寵重二郎丸に秘事を授けざる事	一五六
四七	六波羅別当長慶、最後の時、時元が秋風楽を聞きて入滅の事	一五八
四八	徳大寺左大臣実能が宿執の事	一五八
四九	孝博入道、管絃に執心の事	一六〇
五〇	京極大相国宗輔、生前死後笛に執心の事	一六一
五一	知足院忠実、宿執にて箏を弾ずる事	一六三
五二	藤原守光、重病を冒して薩摩より釈奠に馳せ参ずる事	一六三
五三	藤大納言美国、子息の肩に係り清暑堂に参りて神楽の事	一六四
五四	西行法師、後徳大寺左大臣実定・中将公衡等の在所を尋ぬる事	一六五
五五	うへすぎの僧都、法執に依りて死後鬼となる事	一六七
五六	妙音院師長よりの啄木の曲の伝授をめぐる、藤原孝道と二条大納言定輔の確執と執念の事	一六八
五七	法深房孝時と七歳の嫡女、芸道執心の事	一七一
五八	全舜法橋、臨終に木工権守孝道を招きて万秋楽序を聴く事	一七三
五九	大神基政、陵王の荒序を基賢・宗賢・景賢・景基と嫡々相伝の事	一七四
六〇	建長二年八月十四日、葉室定嗣出家の時、宿執に催されて詩歌を作る事	一七五
闕 評 第二十四		
六一	(序) 闕評は未だしきに慎むべき事	一七六
六二	保延六年夏、滝口源備、宮道惟則と闕評の事	一七八
六三	仁平元年九月賀茂行幸に、隨身秦公春狼藉者を搦め捕る事	一七九
六四	静賢法印家の力者馬允某、小冠者と闕評の事	一八一
六五	千葉胤綱、三浦介義村を罵り返す事	一八三
六六	天福元年祇園十列の折に、秦兼友秦久清の狼藉を訴ふる事	一八四

古今著聞集 卷第十六

一八五

興言利口 第二十五

一八五

五七 (序) 興言利口は当座に笑を取り耳を驚かす事

一八五

五八 大納言経信、下野敦末を不幸の者の十列と評する事

一八五

五九 知足院関白忠実、侍を勘当の事

一八六

五〇 藤原有盛、主君宇治左府頼長に逢ひ、装束を着用に及ばず周章下車したる事

一八六

五一 藏人判官範貞、内覧の大臣頼長を見知らざる事

一八六

五二 中納言家成、黒馬を下野武正に与ふる事、並びに所領の沙汰の者、馬ねぶりの事

一八七

五三 下野武正、山崎を領知の事、並びに競馬に負けて酒肴を供する事

一八九

五四 修理大夫行通大藏卿に昇任せし時、或る人に返歌の事

一九〇

五五 ある房官、あがり馬六の葦毛に乗りて落馬の事

一九〇

五六 二条中納言実綱家にて、侍ども雨の夜試胆の事

一九一

五七 秦兼国、撰錄松殿基房の春日詣に供奉、官人に召さるる事

一九一

五八 秦兼任召次の長になりたる時、年来の独り従者を踏み責めたる事

一九二

五九 妙音院入道師長、孝道の不参に依りて勘発の事

一九五

六〇 近江法眼寛快、供米の不法を諷する事、並びに文覚と相撲の事

一九六

六一 普賢寺入道基通、粟田口大納言忠良と比興の和歌を贈答の事

一九九

六二 皇后宮大夫俊成の口ずさみに、ある女房連歌の事

二〇〇

六三 北院の御室守覚法親王、老狂女と問答の事

二〇一

六四 北院の御室、隨身中臣近武が袴際を執し、上童に着せさせ給ひたる事

二〇三

六五 一条二位入道能保の隨身下太友正、人喰ふ犬を打擲の事

二〇三

六六 下野武守、その女を秦頼武に嫁せしむる事

二〇四

六七 坊門院の蒔絵師某、大仮名にて返事の事

二〇五

六八 坊門院侍長兵庫助則定、雑仕の老女小松を最愛の事

二〇六

五九	たつみの權守、六波羅にて問注の事	三〇七
五〇	下野武景が異名、善知識の府生の事	三〇八
五一	泰覺、南都の僧六人の六首に、一首にて返歌の事	三〇九
五二	治部卿兼定が侍馬允某、増円法眼と連歌して荒言の事	三一〇
五三	増円法眼、うとめ増円と称せらるる事	三一一
五四	進士志定茂、行藤の着方を知らざる事	三一一
五五	馬助入道の間男中太冠者、行藤の片方を着用の事	三一二
五六	承元二年十月、進士定茂文殿の作文に夏の袍を着て参る事、並びに新調の車を雨に濡らさざる事	三二三
五七	下野種武、大坂名にて散状書く事	三二四
五八	順徳院の御時、恪勤者某傍輩と賭け、内裏の番替りに高足駄にて油小路を通行の事	三二四
五九	小川滝口定繼が下人某、寝惚けて中将実忠を召出す事	三二六
五〇	七条院の権大夫、孝道と和歌を贈答の事	三二八
五一	七条院の女房、備後・越前・尾張等の機智に富める言葉だたかひの事	三二八
五二	七条院の尻ひりの判官代に、孝道療治の法を教示の事	三三〇
五三	聖覺法印の力者法師、築地の崩れを築く者どもの話を聞きとがめ罵りたる事	三三三
五四	外宮権禰宜度会盛広、妻に筑紫女を抱懷したしと請ふ事	三三三
五五	山僧、児を具して竹生島へ参り、老僧の水練を見る事	三三四
五六	ある宮腹の女房の局にて、みそか法師尿を漏らす事	三三五
五七	藏人某の妻、珍らしき素服の事	三三六
五八	大女と小男と同衾の事	三三九
五九	中間法師・山臥・鑄物師同宿し、山臥鑄物師を装ひ、片釜進呈を約して、家主の遊女を犯す事	三三九
五〇	ある女房、よき声の念仏者に恋着の事	三三九
五一	ある僧一生不犯の尼に恋着し、女と偽りてその尼に仕へて思ひを遂ぐる事	三三三
五二	南都の一生不犯の尼、臨終に念仏を唱へざる事	三三七

- 五三 ある僧説法の導師となり、ひそかに約して尼公を泣かしむる事……………二三八
 五四 周防国曾禰の領主が童、わが母を領主にすむる事……………二三九
 五五 能書の智了房無沙汰の事……………二四〇
 五六 坊城三位入道雅隆、正月朔日の餅鏡の事……………二四一
 五七 坊城三位入道雅隆が五七日忌の導師阿闍梨順聖の説法比興の事……………二四二
 五八 嵯峨釈迦堂の通夜に、ある僧朗詠し、孝道色代の事……………二四三
 五九 双六の勝負に、隣家の僧越前房のさかしらの差出口を孝道入道、腹に据ゑ兼ねたる事……………二四四
 六〇 前大和守時賢が墓守、弓の上手を誇示せんとして鹿を取り逃がす事……………二四四
 六一 縫殿頭信安、強盗を制せんが為家に竹の節を散らし置き、近火に周章転倒の事……………二四五
 六二 田舎侍為俊、壬生二品家隆家の加冠に、比興の名付けの事……………二四六
 六三 僧田慶ひえどりの毛をむしるに、家隆詠歌の事……………二四七
 六四 尾張内侍、簾中にして少納言阿闍梨某の朗詠を評する事……………二四七
 六五 橘藏人大夫有季入道の青侍、不運の事……………二四七
 六六 ある上達部、左府入道隆忠を知らずして、嵯峨辺りの一老僧と思ひ失礼したる事……………二四八
 六七 左衛門尉某、烏帽子を着用せずして、前隱岐守永親を訪ぬる事……………二四九
 六八 將軍入道頼経はじめて上洛の時、若女房奉行の武者に連歌の事……………二五〇
 六九 四条院崩御の時、醍醐大僧正の弟子某比興の消息の事……………二五一
 七〇 寛元御禊に、院の御棧敷の前にて、馬允某三度名のりの事……………二五一
 七一 宝治の日吉御幸に、供奉の侍染め損じたる狩衣を着用の事……………二五二
 七二 建長元年閑院殿焼失の翌日、宮左衛門某、大納言二品局へ参る事……………二五三
 七三 建長四年維摩会の延年に、春日社の神人季綱を鼓打ちに召す事……………二五三
 七四 少将入道善忍の下人興言の事……………二五四
 七五 兵庫頭仲正秘蔵の美女沙金をめぐる争ひに、佐実髻を切らるる事(抄入)……………二五四
 七六 高倉宰相茂通と栄性法眼と交遊・放逸の事(抄入)……………二五五
 七七 権漏刻博士季親が連句の事(抄入)……………二五五
 七八 賀縁阿闍梨に監行肉食の人と誹謗され、慈恵僧正起請文を書く事(抄入)……………二五六

古今著聞集 卷第十七

二六

怪 異 第二十六

二六

五九 (序) 怪異の畏れ古今慎しむべき事

二六

五八 延長八年七月、流星怪雲等出現の事

二六

五七 天慶三年十二月、出雲国の黒島俄かに消失の事

二七

五六 天慶四年正月、出雲国島根・楯縫両郡の境に氷塔出現の事

二七

五五 後朱雀院、四条御屏風の上に怪人を御覧して、崩御の事

二八

五四 保延六年秋、崇徳院夢に白河僧正増智を見給ひて後、御不例の事

二八

五三 治承二年六月、流星地に落つる事

二九

五二 治承四年四月、大辻風の事

二九

五一 清長卿貴主の時、船岡にて冠の怪異の事

二七

変 化 第二十七

二七

五八 (序) 変化は千変万化して人心を惑はせどもその信を取り難き事

二七

五九 仁和三年八月、武徳殿の東の松原に変化の者出づる事

二七

五八 延長七年四月、宮中に鬼の足跡の事

二七

五七 延長八年六月、右近の陣に変化現はれたる事

二七

五六 延長八年七月、下野長用殿富門武徳殿の間にて鬼神と出会ふ事

二七

五五 承平元年六月、弘徽殿の東欄に変化出現の事

二八

五四 天慶八年八月、内裏に群馬の音聞え、鬼と馬の足跡残りたる事

二八

五三 二七日の秘法に依りて、琵琶玄象あらはれたる事

二九

五二 水餓鬼、五宮の御室の許にあらはれたる事

二九

五一 久安四年夏、法勝寺の塔上にて天狗詠歌の事

二九

五八 二条院の御時、南殿に変化の事

二九

- 五九 承安元年七月、伊豆国奥島に鬼の船着く事……………二七九
 六〇 東大寺の春舜房、上醍醐にて天狗に浚はるる事……………二八〇
 六一 近江守仲兼、東寺の辺にて僧形の変化に出会ふ事……………二八一
 六二 庄田頼度、八条殿の変化を捕縛する事……………二八三
 六三 薩摩守仲俊、水無瀬山中の古池にて変化を捕ふる事……………二八五
 六四 建保の比、大原の唯蓮房法驗に依りて天狗の難を通る事……………二八七
 六五 建保の比、御湯殿の女官高倉が子あこ法師失踪の事……………二八九
 六六 大納言泰通、狐狩を催さんとするに、老狐夢枕に立つ事……………二九一
 六七 斎藤助康、丹波国へ下向し古狸を生捕る事……………二九六
 六八 三条前右大臣実親の白川の亭に、古狸飛礫を打つ事……………二九九
 六九 觀教法印が嵯峨山庄に飼はれたる唐猫、変化の事……………二九九
 七〇 仁治三年、大嘗会に、外記庁内のもちの木梢に臥せる法師の事……………三〇〇
 七一 仁治の頃、伊勢国書生の庄の法師上洛の帰途天狗に逢ふ事……………三〇〇

古今著聞集 卷第十八

飲 食 第二十八

- 六二 (序) 食は人の本にして酒は三友の一なる事……………三〇三
 六三 中関白道隆沈酔の事……………三〇三
 六四 寛弘三年三月、一条院に行幸酒宴の事……………三〇四
 六五 万寿二年正月、関白頼通以下太后・皇太后宮へ参り盃酌の事……………三〇五
 六六 道命阿闍梨、そまむぎの歌を詠む事……………三〇六
 六七 禅林寺僧正深覺、瓜の歌を詠む事……………三〇六
 六八 長谷前々大僧正覺忠、俊恵法師と粽の歌を贈答の事……………三〇六
 六九 知足院忠実、箏の師匠中納言宗輔を饗応の折、道良朝臣瓶子をとる事……………三〇七
 七〇 左京大夫頼輔、証尊法印と連歌の事……………三〇八

三二	左京大夫顯輔、青侍と連歌の事	三〇九
三三	式部大輔敦光、奈良法師と飛鳥味噌を連歌の事	三〇九
三三	法性寺忠通、元三に皇嘉門院にして菓物を参る事	三〇
三四	鳥羽院御位の時、侍読菅原在良に酒を賜ふ事	三〇
三五	保延三年九月、仁和寺宝金剛院の仙洞に行幸の事	三一
三六	保延六年十月、白河の仙洞に行幸の事	三二
三七	中院右大臣雅定、鳥羽殿にて秘蔵の手を尽して舞ふ事	三二
三八	仲胤僧都、法勝寺八講に運参、追ひ出されて籠居し詠歌の事	三三
三九	観知僧都、平茸を九条相国に贈るとして詠歌の事	三三
四〇	源俊頼、田上にして法師子の稲を詠歌の事	三四
四一	大外記頼業、中御門左大臣経宗の家に参るたびごとに飲酒の事	三四
四二	文治の頃、後徳大寺右大臣実定、徳大寺の亭に作泉を構へて饗宴の事	三五
四三	暁行法印並びに寂蓮法師、瓜の歌を詠む事	三七
四四	藤井入道実教、梶井宮に参りて盃酌の折、行算房に袖を切らしめたる事	三七
四五	新蔵人邦時、分配を行ひ奔走の事	三九
四六	法眼長真、麦繩の歌を詠む事	三三
四七	藤原季経、秦覺法印の許へ瓜を遣はして写経を乞ひ、法印詠歌の事	三三
四八	九条前内大臣基家、壬生家隆に雪を進め、二条定高に雪を贈る事	三三
四九	壬生家隆、所勞によりて蓮の実のみを食し、坊城殿の池の蓮の実を所望したる事	三四
五〇	醍醐大僧正実賢、餅を焼きて眠るに、恪勤者江次郎これを取りて喰ふ事	三四
五一	石泉法印祐性、篠の歌を詠む事	三五
五二	聖信房の弟子ども葦立を煮るを見て、その座の人連歌の事	三五
五三	相国入道、山蕨を贈られて返歌の事	三六
五四	三条中納言某卿、大食の事(抄入)	三六
五五	老侍、大鴈を喰はずして詠歌の事(抄入)	三八